大伴家持と『暦』

――「年内立春」と春景――

佐藤隆

一　はじめに

近年、東茂美氏の『万葉集の春夏秋冬　古代の暦で楽しむ』[1]が出版された。この書に触発されて、万葉時代に『暦』と関わる歌を大観すると、特に家持は「立夏」やハルタツの語を用い、『暦』から得た知識を和歌に反映させ作歌している。そこで家持たちの、日々の暦日意識[2]や季節（二十四節気）に関わる節月意識と作品との有り様を見てみようとするのが、本論の目的である。

平安時代の『古今和歌集』は、巻第一「春歌上」の巻頭歌として、

ふる年に春たちける日よめる　　在原元方
年のうちに　春は来にけり　ひととせを　去年（こぞ）とやいはむ　今年（ことし）とやいはむ　（一一）

の十二月中に立春が来た年内立春の和歌を載せ、二首目には、

春たちける日よめる　　紀　貫之
袖ひぢて　むすびし水の　こほれるを　春立つけふの　風やとくらん　（一二）

の新年になってからの立春の歌を載せている。編纂において『暦』を意識し時間軸を基準に、その年のうちの「年内立春」、そして「新年立春」と続けて歌集を始めている。

『万葉集』にも「年内立春」に注目した歌がある。家持たちによる天平勝宝九（七五七）歳の「十二月十八日に、大監（だいけん）

物三形王の宅にして宴する歌三首」（20四四八八～九〇）「二十三日に、治部少輔大原今城真人の宅にして宴する歌一首」（20四四九二）の二作品群である。

これらの作品群が生まれた年を確認しておくことにする。天平勝宝七（七五五）年の一月に唐風に重きを置く藤原仲麻呂らによって、唐が「年」を「載」に改めたことに追随し、「年」から「歳」と改められた。その「載」が天平勝宝九（七五七）歳の八月に天平宝字と改元されると、「歳」も「年」に戻されている。このように暦の大枠である「年」の記載に関心を持つ年が、天平宝字元（七五七）年であったのである。そしてその年の家持は、三形王宅と大原今城宅の両歌群の何れの中にも「ハルタタバ」「ハルタチヌ」の語を用い、「年内立春」に深い関心を示して創作しているのである。その詩的感興の様子に迫ってみる。

なお、家持の春を詠出する作品としては、春愁三首とか絶唱三首とか呼ばれる、天平勝宝五（七五三）年二月の有名な作品（19四二九〇～九二）と左注がある。これらは春の春景の中で詠出されているが、同じ春景を詠出した作品として視野に入れておく。

二　万葉時代の『暦』

『日本書紀』には、

「『卜書・暦本・種々の薬物、付送れ』とのたまふ」（欽明14年（五五三）6月）

「百済の僧観勒来り。仍りて暦本と天文・地理の書、并せて遁甲・方術の書を貢る。」（推古10年（六〇二）10月）

の記事を見ることができる。古くから外来の暦を用いていたことが明らかである。

万葉時代に使用された暦としては、「元嘉暦」「具注暦」「儀鳳暦」「大衍暦」の存在が知られている。これについて大観しておくことにする。

「元嘉暦」は、宋の何承天の作った暦で、6世紀頃百済から伝えられた宋の時代の中国暦で、持統朝まで用いられた。

「具注暦」は、元嘉暦を基に作られた暦。持統朝に始まり、平安時代に広く用いられた漢文の暦本。暦日の下に歳位・星宿・干支・吉凶などが詳しく注記してあるのでこの名がある。

日ごとに二、三行の余白を設けてあるので、日記として利用された。

「儀鳳暦」は、唐の李淳風が作った、唐の時代の中国暦である。『日本書紀』持統４（六九〇）年11月に「始めて元嘉暦と儀鳳暦とを行ふ。」とある。

「大衍暦」は、中国暦で天平宝字７（七六三）年から平安時代（八六一年）まで使われた。『続日本紀』天平宝字７（七六三）年八月に「儀鳳暦を廃めて始めて大衍暦を用ゐる。」とある。

特に具注暦については、具体的に持統三（六八九）年の具注歴が出土[3]している。藤原時代から用いられ奈良時代の官人たちにも広く利用されていたと推察される。

家持たち後期奈良時代の人々は、元嘉暦や儀鳳暦とともに日常的にはおそらく具注暦によって『暦』に従った日常生活をし、天平宝字元（七五七）年には「年内立春」を体験し、和歌を詠出することになったのである。

三　家持の暦日意識と季節意識の概観

では、家持が万葉時代の後期において、『暦』をどの様に取り込み作歌しているかを考えてみたい。

家持の初期の青春時代をみることにする。この時代は相聞歌世界とともに四季の特に秋に関心を持ち、

「秋」（８一五六六～六九）（８一五九七～九九）

「七夕歌」（17三九〇〇）

「秋風」「秋の夜長」（３四六二）

などをテーマとする作品が見られる。『暦』との具体的な関わりは不明であるが、季節感を発揮し独自の季節観の中で作品を創作している。そして、恭仁京時代に入ると、天平十三（七四一）年四月三日に、

橙橘初めて咲き、霍公鳥飜り嚶く。この時候に対ひ、記志を暢べざらめや。因りて三首の短歌を作り、以て欝結の緒を散らさまくのみ。

あしひきの　山辺に居れば　ほととぎす　木の間立ち潜き　鳴かぬ日はなし　（17三九一一）

ほととぎす　何の心そ　橘の　玉貫く月し　来鳴きとよむる　（17三九一二）

ほととぎす　楝（あふち）の枝に　行きて居ば　花は散らむな　玉と見るまで　（17三九一三）

右、四月三日に、内舎人大伴宿禰家持、久邇京より弟書持に報へ送る。

の作品を残している。題詞によれば、初夏の時候に特別の興味を覚えての作品である。家持は題詞に記すように、「橙橘」から初夏の景物である橘の香りの高い白い花と、やはり初夏を感じさせる鳥ホトトギスの鳴き声から、初夏の時候（季節）に興味を感じ、その時候の世界を中心とした和歌を創作することによって、鬱結した心を晴らすとしている。この家持の心境の背景には、おそらく『詩経』の詩論[4]に影響があり、鬱結した心は和歌で晴らすことができるという歌論を持っていたと考えられる。付け加えれば、この時期の家持は、弟書持とともに盛んに作品交流をする。この三首も前日二日の書持のホトトギス詠に応えた作品であった。家持は書持との文芸交流の中で、花の橘と鳥のホトトギスを軸に初夏の時候に深い関心を持っていたことに注意したい。

次に越中守時代をみることにする、家持は天平十九（七四七）年には、春の年中行事である「上巳」（三月三日）に特別の関心を示している。大伴池主と積極的に交流を始めた家持は、『暦』の暦日によって登場する「上巳」を意識的に捉え、「上巳」をめぐる多くの意欲的な作品（17三九六五～七七）を残している。当時の官人たちが利用していたであろう『荊楚歳時記』[5]の影響もあったと推察する。

そして、その天平十九（七四七）年の初夏に近づくと、天平十三（七四一）年と同様に橘とホトトギスと関わりながら再度初夏に関心を持つ。そして自然界の季節と関わる『暦』上の二十四節気、その節月知識である「立夏」に対しても明確に意識した作品が登場する。

立夏四月、既に累日（ろいじつ）を経ぬるに、由（なほ）し未だ霍公鳥（ほととぎす）の喧（な）くを聞かず。因りて作る恨みの歌二首

あしひきの　山も近きを　ほととぎす　月立つまでに　なにか来鳴かぬ　（17三九八三）

玉に貫く　花橘を　乏（とも）しみし　この我が里に　来鳴かずあるらし　（17三九八四）

霍公鳥は、立夏の日に、来鳴くこと必定（ひつぢやう）なり。

また越中の風土は、橙橘のあること希らなり。これに因りて、大伴宿禰家持懐に感発して、聊かにこの歌を裁る。　三月二十九日

である。題詞に「立夏」の語を記し作品が展開されている。「立夏」を過ぎても、まだ来て鳴なかないホトトギスを恨みながら橙橘とともに詠出する。暦上の節月の「立夏」にこだわり、「月立つまでに」と表現した作品であるが、家持の関心の中心はホトトギスである。そこに共にあるべき薫り高く薬玉として緒に貫く花橘を添え、さらにそこに節月の「立夏」の世界を加えての詠出である。前述の恭仁京時代の天平十三年四月の作品と同種の趣向ということになるが、恭仁京時代の漠然とした初夏の「時候」ではなく、暦上の節月の「立夏」にこだわっての作品が構成されていることに注意したい。

題詞では「立夏四月」とするが、左注では「三月二十九日」と注を加えている。暦上の暦日では「三月二十九日」であるが、すでに節月の「立夏」が訪れたことを作品に明示して、暦日と節月の世界を意識的に捉えた世界を演出しているのである。なお、この年の立夏は三月二十五日と推定されている。ホトトギスと立夏との関わりについては、すでに橋本達雄氏が『萬葉集全注』の【考】[6]で晩春説と立夏説について詳しく述べ、家持が日本の現実に合わせて、立夏に鳴き始めるとしたとしている。

「立夏」に関わる作品は、翌年の天平二十（七四八）年にも登場している。

四月一日に、掾久米朝臣広縄が館に宴する歌四首

卯の花の　咲く月立ちぬ　ほととぎす　来鳴きとよめよ含みたりとも　（18四〇六六）

右の一首、守大伴宿禰家持作る。

二上の　山に隠れる　ほととぎす　今も鳴かぬか　君に聞かせむ　（18四〇六七）

右の一首、遊行女婦土師作る。

居り明かしも　今夜は飲まむ　ほととぎす　明けむ朝は鳴き渡らむそ〈二日は立夏の節に応る。故に明けむ旦に喧かむといふ〉」　（18四〇六八）

右の一首、守大伴宿禰家持作る。

明日よりは　継ぎて聞こえむ　ほととぎす　一夜のからに　恋ひ渡るかも　（18四〇六九）

右の一首、羽咋郡の擬主帳能登臣乙美が作

の掾久米広縄館における宴歌であり、すべての人々の作品にやはりホトトギスが登場している。暦日の四月一日となり、初夏にホトトギスが館に鳴き渡ることを熱望しての宴であった。天平二十年の「立夏」は、家持が自身の作品に注として「二日は立夏の節に応る。故に明けむ旦に喧かむといふ」と記しているように、翌日の二日に訪れている。家持は、宴の開かれた一日に翌日の二日に訪れる暦の節月である「立夏」を強く意識し、その世界を取り入れて「卯の花の咲く月立ちぬ」と詠み、「ほととぎす明けむ朝は鳴き渡らむそ」と詠むのである。

家持は、自然界の初夏の季節を告げる鳥であるホトトギス詠を制作するにあたって、四月二日が節月の「立夏」であるという暦上の知識に関心を持ち、「立夏」の世界も同時に取り込み詠出している。知識上の観念世界と自然界の現実世界との共演とも言えよう。

越中守時代も終盤に近づいた天平勝宝二（七五〇）年、家持はさらに「立夏」に関わる作品を残している。

二十四日は立夏四月の節に応る。これに因りて二十三日の暮に、忽ちに霍公鳥の暁に喧かむ声を思ひて作る歌二首

常人も　起きつつ聞くそ　ほととぎす　この暁に　来鳴く初声　（19四一七一）

ほととぎす　来鳴きとよめば　草取らむ　花橘を　やどには植ゑずて　（19四一七二）

の作品を詠出し、後日、

更に霍公鳥の哢くこと晩きを恨むる歌三首（内一首）

月立ちし　日より招きつつ　うち偲ひ　待てど来鳴かぬ　ほととぎすかも　（19四一九六）

と「題詞」に「二十四日は立夏四月」と記し、『暦』の暦日意識と節月意識を明確に意識し、歌に「月立ちし日」と表現して、ホトトギス詠を完成させている。青木生子氏は『全注十九』においての【考】にて、三首の最後にあるこの作品について、

ほととぎすを待つ心を、暦の上の季節感に即しながら、その期待に反する怨みを述べることで全体を結んでいる。

としている。「暦の上の季節感に即しながら、」という指摘は注意すべきである。現実世界と暦上の想像世界との中で制作されている。

このように、家持の恭仁京時代から越中守時代の終盤までを通観してみると、家持は現実の自然界から生じる季節の推移を敏感に捉えるとともに、『暦』に示された暦日から年中行事である「上巳」に興味を持ち、さらに『暦』から節月の「立夏」の世界にも深い興味を持ち、和歌作品を詠出している様子を確認することができる。

なお、家持が初夏や立夏に深い関心を示すようになる背景には、弟書持から始まるホトトギス詠の存在が大きく働いている。

四　「月立つ」から「春立つ」

家持が「立夏」の作品に用いた表記は、題詞や注記から「立夏」と判断できるのみである。つまり、ナツタツやナツタチヌ等の表現は用いていないのである。表現された語は、四季の語を含まない「ツキタツ」（17三九八三）、「ツキタツヌ」（18四〇六六）、「ツキタチシ」（19四一九六）であった。なお、「月＋立つ」の表現は集中八例[7]ある。

ここで、年間の「春・夏・秋・冬」に広げて、万葉集全体の関連する和歌表現を確認すると、

春＋立つ（4例）

「ハルタツ」（10一八一二）、「ハルタチヌ」（10一八一九）、「ハルタタバ」（20四四九〇）、「ハルタチヌ」（20四四九二）※春＋来る、春＋になる等が多い。

夏＋立つ（0例）

秋＋立つ（6例）

「アキタテバ」（1三八）、「アキタテバ」（2一九六）、「アキタチテ」（8一五五五）、「アキタタズ」（10一九六五）、「アキタツ」（10二〇〇〇）、「アキタツ」（20四四八五）

冬＋立つ（0例）

となる。「春」や「秋」には、立（タツ）を加えた複合語の表現が存在するが、「夏」や「冬」にはそれらの語は存在しない。また、これら複合語の表現が存在する「春」や「秋」の用例の中で、暦上の節月の「立春」や「立秋」の意味で明確に用いられた例は僅かで、「春」では「ハルタタバ」（20四四九〇）「ハルタチヌ」（20四四九二）だけであり、「秋」では「アキタチテ」（8一五五五）がその可能性を含んでいる

だけにすぎない。

ここで注目すべきは、その表現を用いた作者の問題である。集中の作者全体の中で、暦上の暦日とともに節月の「立春」「立夏」「立秋」「立冬」に関わって表現しているのは、家持ただ一人だけである。掲載作品数の問題に注意すべきであるが、家持だけが暦上の節月の「立夏」と「立春」に強い関心を持ち、「立夏」関わって「ツキタツ・ツキタチヌ・ツキタチシ」と表現し、「立春」に関わって「ハルタタバ・ハルタチヌ」と表現しているのである。家持が『暦』から得た暦日や節月の知識を活用し、それを和歌世界に取り込む手法に注目したい。

なお、「年内立春」に注目した論ではないが、漢語「立」と和語タツとの間には相違あることを確認し、和語ハルタツやアキタツの成立に言及した新井栄蔵氏の早く総体的な論[8]がある。

五　「年内立春」歌

さて、「立春」に関わって「ハルタタバ」「ハルタチヌ」と表現した家持に目を向けることにする。これらの表現は、暦日と節月の矛盾から生じた「年内立春」を詠出した作品中にある。月の変化と関わる暦日とは別に、太陽の黄道に着目し定められた「冬至」と「春分」の中間にあり、一年の最初の春を意味する「立春」は、「立春」「立夏」「立秋」「立冬」の中で特別な存在である。「立春」は「年内立春」あるいは「新年立春」としても生じるが、いずれにしても一年の全体の始めを示すことにもなるからである。特に年内に早く訪れる「年内立春」は、『暦』上での特殊な存在である。『暦』に関心を持つ家持は、特別な意識を持って受け止め、「年内立春」歌は詠出されていると考える。その当該歌の「年内立春」歌は、

十二月十八日に、大監物三形王の宅にして宴する歌三首

み雪降る　冬は今日のみ　うぐひすの　鳴かむ春へは
明日にしあるらし　　右の一首、主人三形王　（20四四八八）

うちなびく　春を近みか　ぬばたまの　今夜の月夜　霞みたるらむ　（20四四八九）

右の一首、大蔵大輔甘南備伊香真人

あらたまの　年行き反り　春立たば　まづ我がやどに
うぐひすは鳴け　（20四四九〇）

右の一首、右中弁大伴宿禰家持

大き海の　水底深く　思ひつつ　裳引き平らし　菅原の
里　（20四四九一）

右の一首、藤原宿奈麻呂朝臣の妻石川女郎、愛を薄くし離別せられ、悲しび恨みて作る歌なり。年月未詳なり。

（十二月）二十三日に、治部少輔大原今城真人の宅にして宴する歌一首

月数めば　いまだ冬なり　しかすがに　霞たなびく　春立ちぬとか　（20四四九二）

右の一首、右中弁大伴宿禰家持が作

の関連歌を含む二作品群である。これらは、万葉時代の終盤である天平宝字元（七五七）年の、「十二月十八日」に三形王宅で詠出された作品と、「二十三日」に大原今城宅で詠出された作品である。かっての「立夏」の作品ではホトトギスが登場していたが、この「立春」の作品ではホトトギスにかわり、ウグヒスが登場することになる。

宴席に参加した家持たちは、十二月の内に訪れた「年内立春」を明確に意識し、「年内立春」の訪れる日に、ウグヒスの声も添えて迎えたいと詠出している。また、家持は、引き続き開催された二十三日の今城宅宴席においても、「霞たなびく春立ちぬ」と詠出し、再び「年内立春」の世界に執着していることに注意したい。

家持は十八日の三形王宅宴席では、主催者三形王が「冬は今日のみ」「うぐひすの鳴かむ春へは明日にしあるらし」と表現し、冬とウグヒスと「立春」によって詠出した世界を受けて、冬から年が変わり「春立たば」「うぐひすは鳴け」と同趣の世界を詠出する。そして、二十三日の大原今城宅宴席では、「月数めばいまだ冬なり」「霞たなびく春立ちぬとか」と表現し、冬と霞と「立春」で構成される世界を詠出している。

二十三日ではウグヒスは姿を隠し、ひたすら『暦』による暦日を数え季節の冬を確認するとともに、節月の「立春」、それも霞がたなびく「立春」の到来した世界を詠出し、「年内立春」の世界を描く。

また、そこでは「月数めば」の語が用いられている。この語に注目すれば、家持は「具注暦」などの『暦』を実際に利用し、暦日から得た十二月の「冬」の現実を詠み、「しかすがに霞たなびく春立ちぬ」の語に注目すれば、やはり暦上から得た節月の「立春」を想起し、両者の季節のずれを楽しみ、早く迎えることになった春に遊んでいるのである。家持は『暦』によって生まれた二つの世界を利用して、新しい和歌世界を構築し詠出しているのである。

六　春景の歌

家持は、十八日に「春立たばまづ我がやどにうぐひすは鳴け」とし、「立春」とウグヒスの鳴き声との強い結び付きの中で春景を詠出したが、二十三日に至った作品では、そのウグヒスの鳴き声の世界は春景における自明のこととして言外に置き、あらたに「霞」がたなびく「立春」世界の到来を詠出している。家持がこのように「霞」に目を向け「霞たなびく春立ちぬとか」とする表現に到達する経緯について言及しておく。

家持の霞たなびく春の世界を詠出した作品としては、春愁三首とか絶唱三首とか呼ばれる著名な天平勝宝五（七五三）年二月の、

二十三日に、興に依りて作る歌二首

春の野に　霞たなびき　うら悲し　この夕影に　うぐひす鳴くも　（19四二九〇）

我がやどの　いささ群竹　吹く風の　音のかそけき　この夕かも　（19四二九一）

二十五日に作る歌一首

うらうらに　照れる春日に　ひばり上がり　心悲しも　独し思へば　（19四二九二）

春日遅々（ちち）に、鶬鶊（うぐひす）正に啼（な）く。悽愴（せいそう）の意、歌に非ずしては撥ひ難きのみ。仍りてこの歌を作り、式（もち）て締緒（ていしょ）を展べたり。（以下略）

の作品と左注が想起される。家持は、この三首の第一首目にて「春の野に霞たなびき」「うぐひす鳴くも」とするように、自然界の春の霞たなびく野とウグヒスの鳴き声に耳を傾けている。このようにして、春の野にたなびく霞を詠出した家持は、二年後の天平勝宝七（七五五）歳三月三日の上巳の宴と

推察される折に、

ひばり上がる　春へとさやに　なりぬれば　都も見えず
霞たなびく　（20四四三四）

とヒバリとともに春の霞を詠んでいる。このように春景の霞を捉えていた家持が、さらに二年後の天平宝字元（七五七）年に「年内立春」の日を迎えた。そして、現実にはまだ訪れない想像の理想の春景を描くとき、重要要素として想起し取り入れた世界が霞たなびく春景であったと推察する。

なお、『万葉集』には、暦上の「暦日立春」と二十四節月よる「節月立春」とが重なる、「朔旦立春（元旦立春）」の日に制作された作品がある。有名な巻二十の最終歌、

三年春正月一日に、因幡国の庁にして、饗を国郡の司等に賜ふ宴の歌一首

新しき　年の初めの　初春の　今日降る雪の　いやしけ吉事　（20四五一六）

右の一首、守大伴宿禰家持作る。

の家持作品である。万葉集時代の「朔旦立春」は、内田正男『日本暦日原典』によれば、大化元（六四五）年、天武十二（六八三）年、大宝二（七〇二）年、養老五（七二一）年、天平十二（七四〇）年、天平宝字三（七五九）年とされている。

この慶事に注目して早く大浜真幸氏[9]は、「大伴家持作『三年春正月一日』の歌―『新しき年の初めの初春の今日』をめぐって―」において、「暦日立春」と「節月立春」とが重なる特別な「立春」であることと、詠出された「今日」「雪」の表現から、めでたさの格別に重いことを指摘している。ただし、『釋注』[10]が、『日本暦日原典』の「旧暦は平均すれば、ほぼ元旦立春になるように作られているが、」を引きながら、

食い違いのゆえに、年内立春には興味を感じても、元旦立春は家持たちにとって当然のことであったのかもしれない。

としている。やはり、「朔旦立春」と「年内立春」とを比較すると、「年内立春」がはるかに興味深い出来事に違いないのである。

七　おわりに

大伴家持は、初期の青春時代には季節感を磨き、弟書持と

ともに初夏の鳥ホトトギスに注目し、それらから初夏の時候の世界を詠む。

次に越中守時代に入ると、同族大伴池主とともに晩春の年中行事「上巳」の世界に興味を示し多くの作品を制作する。そして、「立夏」近くなると、再び鳥のホトトギスに注目しながら「立夏」の和歌世界へ傾斜するのである。

そして、越中守時代の終盤に入ると、「年内立春」の年に遭遇するのである。家持は、年の内であるのに春が訪れると言う不思議な知識空間の中に遊び、やはり鳥ではあるが春の鳥ウグヒスをあらたに登場させ、「年内立春」とウグヒスとによる空想の化想世界を完成させている。そしてさらに、そこに霞を加え春霞のたなびく春景を表出することにより、家持独自の世界をも獲得しているのである。

つまり大伴家持は、『暦』により年内に訪れた節月の「立春」のみに注目するに留まらず、あわせて春の鳥ウグヒスの鳴き声にも注目し、両者を同時に取り入れている。家持は『暦』からの時間空間世界と鳥からの聴覚世界を融合させ、美しい文雅の世界を完成させる。そして、さらに開催された宴席歌では、聴覚世界から視覚世界に進んでいる。自身の絶唱三首にも用いた「春霞」を加えて、待ち望む「霞たなびく春景」を仮想の中で象徴的に描き「年内立春」歌を成立させていると考える。

この論は平成二十六年四月十三日の美夫君志会四月例会で発表した論を骨子としている。また、自然を愛し草木を愛した森下純昭教授は、中京大学を本年度にてご退職することとなった。今後の充実した日々を過ごされることを祈念する。

注

（1）東茂美『万葉集の春夏秋冬　古代の暦で楽しむ』笠間書院、二〇一三・一一。

（2）暦日意識に着目した早い論としては、関守次男氏「和歌の季節感と暦法意識」「山口大學文學會誌」巻15号―1、一九六四・九・三〇がある。

（3）奈良文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部、石神遺跡第15次調査において出土。

（4）『詩経』の詩論を歌論として発展させる。

（5）『荊楚歳時記』中国、六朝時代の荊楚（現在の湖北・湖南省）地方の年中行事や風俗を記録したもの。梁の宗懍の撰。六世紀半ばごろ成立。

（6）ほとぎすと立夏については、橋本達雄氏『萬葉集全注十七』の三九八三・八四番歌の【考】において、「ほとぎすが立夏の日にきまって鳴くというのはほかにも見られ、（中略）当時常識となっていたことと思われ、家持がとくに吹聴しているが（下略）、中国では普通晩春（三月）の鳥とするのが常識であったようである。」とし、李善注と梁の宗懍（そうりん）撰『荊楚歳時記』逸文の例をあげている。また青木正児氏の論を紹介し、中国ではホトトギスは三月に鳴き始めるとする説と、立夏に鳴き始めるとする説の両説があり、家持は立夏説に従っているとしている。

（7）「月」＋「立つ」の表現作品、8例
（8一六二〇）（13三三二四）（15三六八三）（17三九八三）（18四〇六六）（18四〇八九）（19四一九六）（20四四九二）

（8）新井栄蔵「万葉集季節観攷―漢語〈立春〉と和語〈ハルタツ〉―」『萬葉集研究』第五集、一九七六・七。

（9）大浜真幸氏「大伴家持作『三年春正月一日』の歌―『新しき年の初めの初春の今日』をめぐって―」（『吉井巌先生古稀記念論集　日本古典の眺望』）一九九一・三。

（10）伊藤博『萬葉集釋注十』集英社、一九九八・一二。

（文学部教授）